



若 者

## アメリカ合衆国をはじめて旅して

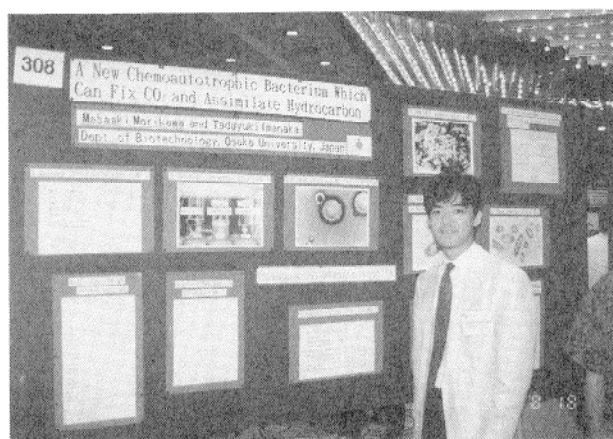
森 川 正 章\*

### My first trip to U. S. A.

**Key Words :** Washington D. C., Los Angeles, Davis, Chicago

私は本紙の当欄に寄稿させていただくときには、研究の話題はさけて息抜きに読んでいただけるような内容にしたいとかねてより思っておりました。そこで少し前のことになりましたが、初めて国際会議に参加したときに感じたこと印象に残ったことを書かせていただくことにします。海外渡航に不慣れな若輩者がまるで子供の遠足のように驚きあるいは感心しながら綴った旅行記ですが、少しでも共感していただけたところがあれば幸いです。

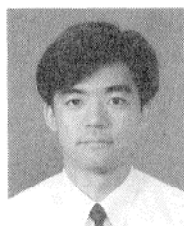
1992年8月16日より8月21日までワシントンD. C. にごく近い、ヴァージニア州クリスタルシティにて開催された第9回国際バイオテクノロジーシンポジウム(米国化学会主催)に参加する機会に恵まれました。そこで、この機会を利用してカリフォルニア州ロサンゼルスと同州デービスおよびイリノイ州シカゴに留学中の友人と同僚を尋ねることにしました。海外渡航は6年前の新婚旅行(オセアニア方面)以来2回目でしたが添乗員のいないのは初めてでひとつひとつが思い出に残る旅行となりました。



第9回 国際バイオテクノロジーシンポジウム  
(於 クリスタルシティ)に参加中の著者

出発日が夏休み中ということもあり、先ず大阪空港国際線のカウンターで予約券を搭乗券に引き換えるための行列の長さに圧倒されました。研究室の旅慣れた学生からは『座席は足が伸ばせる一番前が離着陸の際にスチュワーデスとも向かい合わせに座れていいですよ。』とは聞いていたのですがそんな都合の良い席はとうの昔に“OCCUPIED”でした。おくれればながら『円高景気で海外旅行者が急速に増えた』ことを十分に実感させられたのですが、帰りの飛行機で隣合わせた小学生の一人を見たときには『こんなに小さい時分に子供同士で海外へ行かせることでどれだけ本人の人間形成に役立つのだろう』と疑問さえ感じました。彼らに何かの出演など特別な目的があったのなら話は別ですが、自立心を養うのなら国内で一人旅をさせた方が効果的でしょうし、観光が目的なら家族で旅行をした方が親子の会話も弾んで単なる観光

\* Masaaki MORIKAWA  
1960年10月13日生  
昭和60年(1985年)大阪大学大学院  
工学研究科醗酵工学専攻前期課程  
修了  
現在、大阪大学大学院工学研究科、  
物質・生命工学専攻、極限生命工  
学講座、助教授、工学博士、特殊  
環境微生物学  
TEL 06-877-5111(内線 3445)  
FAX 06-879-7448  
E-Mail morikawa@chem.eng.  
osaka-u.ac.jp



以上のものがきつと得られるに違いないと思います。余計なお世話かも知れませんが、あれは少し裕福で忙し過ぎる日本の親達の間違ったお金の使い方と無責任教育の現れのように思えてなりませんでした。とにかく何とか飛行機に乗り込みヘッドホンサービスを一通り楽しんだころ、機内サービスの時間がやってきました。最初は飲み物でしたので、ミルク入りのコーヒーと言ったところ意に反してカフェオーレが支給されました(皆さんはご存じのとおり、ミルクは牛乳のことなのです)。このときに『コーヒーにミルクを入れますか』と聞く日本の習慣を恨みました。それ以来、私は家庭においても『クリームを入れてくれ』と言うようにしています。ちなみに、コーヒーフレッシュというのも日本だけのようです。

最初の訪問地はロサンゼルス、空港まで出迎えてくれた友人とは2年半ぶりの再会でした。滑走路が混雑していたためになかなか着陸できず、到着時刻が1時間も遅れたことを詫びた後、なつかしくお互い元気であることを喜びあいました。ホテルのチェックインをすまし、米国滞在が3年目に入ってすっかり貫禄のついた友人が自らの車でビバリーヒルズ、ロデオドライブ、ラシェネガ、チャイニーズシアター、ファーマーズマーケットなどの有名観光地を案内してくれました。特にビバリーヒルズからハリウッドにかけて車窓から見えた町並みはどこかの映画で見たような気がするものばかりで『ああ、その中に自分がある』と実感しました。途中、車を駐車場に入れたときとガソリンスタンドでは日米のシステムの違いを初めて知りました。日本の場合、駐車場は入庫時刻を記した券をもらい後で料金を支払うのが普通ですが、ロサンゼルスの場合、最初に多めの金額を預けた後で残金を清算する方式なのです。つまり日本のように車のキーを係員に預けるのは車内を荒らして結構ですと言っているようなもので(ときによっては車ごとなくなる?)後払いにすると料金を支払わずに逃げる人がいるのでしょう。アメリカのガソリンスタンドではセルフサービスがごく当たり前ですが、同じカリフォルニア州でも治安のよい場所(デービス)は後払い、治

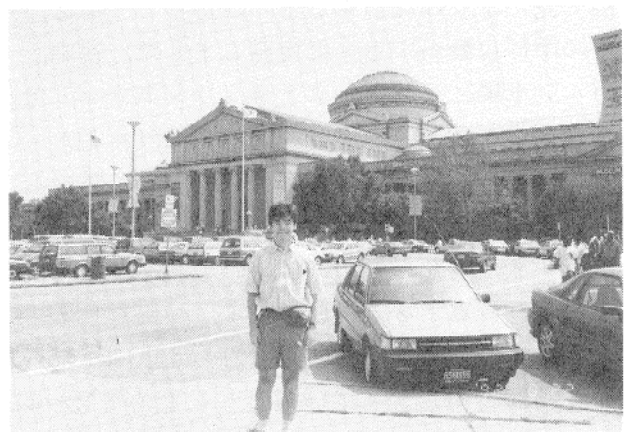
安のよくない場所(ロスアンゼルスや後に訪れたシカゴ)では先払いというのもうなずけました。ちなみにシカゴの場合、ハンドルをロックするバーを付けるのは当たり前で、カーステレオ盗難予防のためには切れたコードをいっぱい付けて既に荒らされたように見せかける偽装キットも売られているそうです。夕食はリトルトーキョーで寿司を食べました。カリフォルニア巻に入っているアボガドは醤油とわさびで食べるとトロにそっくりだと言う言葉を信じて試してみましたが、やはり先入観があるためか期待したほどではありませんでした。そこでウニを頼んだところ、ウニのうえにウズラの卵が落としてあるのには驚きましたがこちらの味は上々でした。板前さんをはじめウェイトレスも日系人でしたが当然ながら聞こえてくる会話は英語ばかりで寿司を食べつつも異国情緒は十分に味わえました。アメリカ第一日目の夜は空港近くのホテルに宿泊したのですが日本のビジネスホテルに慣れている私にはこれでシングル?と疑わせるくらいに大きな部屋と大きなベッドだったのには感激しました。10時間の時差のため既にいつでも眠れる態勢になっていた私は飛行機の音を聞きながら、ああロサンゼルス空港は24時間空港なのかと思いながらすぐに寝入っていました。

二日目早朝にはロサンゼルスを後に、サクラメント空港からデービスに入りました。そこは昨日の都会とはうってかわった一面の大平原が広がる世界でした。行き交う車の10台に1台はトマトを満載したトラック(映画『コンボイ』に出てくる大型のもの)、ひまわりの花が絨毯のように大地を埋め、どこまでも青い空にはグライダーが悠々と飛んでいました。早速、カリフォルニア大学デービス校を同僚の案内で見学しました。ここはその立地条件からか、獣医・畜産関係の研究が有名で、キャンパスのあちこちに囲いを巡らした牧場が見られました。ある製薬会社の人に聞いた話によると米国では動物実験を行うのは獣医であるため、新薬を開発する際には、人を扱う医者と同様獣医の判断が大きな影響力を持ち、獣医の地位は非常に高く人気のある職種らしいとのことでした。学生協に

は日用品・書籍・食堂に加えてゲームセンターやボーリング場と至れり尽くせりの様子でした。大学のロゴ入りのベビー服があったり、学生用の託児所があるのもこの国なら少しも変ではないようでした。当然学問環境に関しても充実しており、夜10時まで開館している図書館にずらり並んだコンピューターはすべてインターネット端末として自由(無料で)に利用でき、情報検索なども瞬時にして行えるようになっていました。図書館の蔵書数も相当なものと思われました。研究室に並んだ装置機械類は阪大と大差ないのですが、建物や廊下の広さ、部屋の美しさなどは比較できるものではありませんでした。学生(院生)は研究に対して熱心で、夜遅くまで実験をし、休日も大学に出てくる様子は日本と全く変わらず、日本人の働き過ぎは大学では全く目立たないようでした。当時はまだベトナム戦争の影響もありアメリカの財政事情は厳しく、カリフォルニア州の場合大学の予算は前年度比で25%削減され、留学中の同僚も『子供の頃に思い描いていたアメリカほどではないのが残念だ』と言っていました。夕飯には顔ほどの大きさのステーキを食べ、自家製ビールの味も格別でした。また、市内のテニスコートは夜12時まで無料開放されており、高いお金を払って予約するのが当然の日本の事情を聞いたら向こうの学生は仰天していました。ただ、夜がふけるにつれ照明のタイマー間隔がだんだん短くなりラリー途中でもコートサイドまで走って延長スイッチを押しに行かないといけなのがちよっと不便でした。翌朝、朝市が出ているということで散歩がてら覗いてみましたが、さすがにここはカリフォルニア!花と果物と野菜の種類、色とその大きさには驚かされました。また、明らかに65才以上と思われる人が多く、朝起きはご老人の得意とするところなのだろうと思っていたのですが、デービスは気候が良く安全な町なので定年退職した人が多く移住してこられると聞いてなるほどと思いました。デービスからサンフランシスコ市街までは車で約一時間ほどの距離でした。サンフランシスコは坂道が多く、ここでまたなるほどと思ったのは、路上駐車している車は皆ハンドルを左にきってタイヤを歩

道にぶつけるようにして止めてあったことでした。これは万一車が坂道を下りだしてもすぐにとまるための工夫なのでした。

会議の開かれたワシントンD.C.郊外は一言で『とても美しい町』という印象でした。地下鉄も後述のシカゴとは全く異なり安全で清潔な感じでした。特にスミソニアン周辺は国会議事堂やリンカーン記念館をはじめ博物館も多く世界中からの観光客が集まっていました。ホワイトハウスも一般公開されていましたが、整理券配布時刻にあわせて朝8時に行ってみたところその行列は既に数百メートルにわたっておりその日のうちに見学できるのかと思わせるほどでした。結局入館をあきらめました。観光地で行列するのは日本ばかりではないのだなと思いました。博物館のうちでも特に航空宇宙博物館はライト兄弟の飛行機からアポロ宇宙船や月の石(手で触れることができる)まで歴史的な展示物ばかりでこれで無料かと疑いたくなるほど充実した内容でした。賛否両論あるところですが今の話題はなんといっても広島に原爆を投下したB29爆撃機エノラゲイの展示でしょう。博物館と言えばシカゴにある産業科学博物館も規模は大きく、皆様も一度訪れられることをお勧めします。ここで衝撃的だったのは10cm厚程度の人体のスライス標本と受精から出産まで成長していく胎児のようすをホルマリン標本にしてある展示物でした。



シカゴ産業科学博物館前にて

注意書には『少々気分が悪くなる人もいるかも知れませんが、貴重な標本なのでよく観察して下さい』と書いてあります。小さな子供のう

ちからこんなものを見ていればおのずと科学(医学も含む)に関心が深まるだろうと確信しました。世界一、二位を誇る国民総生産を上げている技術立国日本に同等規模の産業博物館がないのが不思議なくらいに感じられました。最近、理科系ばなれと言われますが、日本でも科学技術に関する博物館の充実と入場料金の低減がその解決策のひとつとして望まれるところで

す。西海岸から東部に入ったときに空港で感じたのですが西に比べて東は皆が忙しそうで、ぎすぎすした雰囲気でした。スチュワーデスの対応すらなんとなくつっけんどんな気がしました。またシカゴはまさに人種のるつぼでイタリア系あり西アジア系、東アジア系ありと様々な人を見かけました。夜中もパトカーのサイレンが止むことはなく、先日も近くで殺人事件があったり大学構内でも夜遅くなるとひとりで駐車場に行くのは危険だなどと言う話を同僚から聞くとさすがマフィアの暗躍する町だなと思いました。シカゴの地下鉄は構造上、車輛間の移動はできないようになっており、昼間の乗客のまばらな孤立した車内では大きなスーツケースをもって気弱そうな日本人など狼のまえに飛び込んできたウサギのように簡単に襲われてしまうのではないかと目的地につくまでは気が気ではありませんでした。競争の町シカゴには世界一をほこるものがやたら多く、ビル建造物では高さ

世界一のシアーズタワーがあり、変わったところでは世界一の噴水もあります。

シカゴのアメリカ人は特に世界一が好きなようでした。ただいずれも少々無理をしてなんとか世界一にした感じで、シアーズタワーは避雷針が極端に長く、噴水はやたら回りに飾りを広げたという印象でした。やはり研究に限らずどんな分野でも世界一のタイトルは並大抵の努力と定法だけを使っていたのでは獲得できないのでしょうか。また、世界一ではないと思いますがシカゴ・オヘア空港の大きさには仰天してしまいました。成田空港や関西空港などは国内線専用といってもよいくらいの規模に思われました。シカゴに来てはじめて、日本で想像していた巨大国家アメリカの片鱗を見ることができたと思いました。ここでは触れませんが学会発表ではつたない英語もそれなりに通じたらしく、たくさん質問やコメントをもらって非常に有意義であったことを申し添えておきます。今度もし再びアメリカを訪れることができればぜひボストンやニューヨークを訪れたいものです。以上、漫然と思い出すままに書きつづってきましたが私にとって非常に多くのことを経験できた一週間でした。

最後になりましたが、本欄への執筆を勧めてくださいました。工学部応用生物工学科教授 今中忠行先生に感謝いたします。

